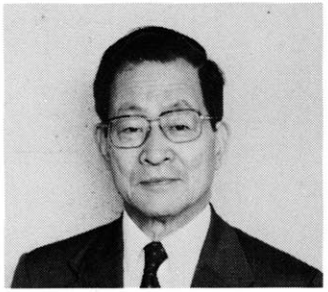

館長就任の挨拶

大和文華館
館長　吉川逸治

大和文華館を取りまく自然も夏の盛りが過ぎ、秋の到来を予告し始めます。あれほど咲き乱れた百合の花も終り、紫の桔梗が可愛らしい顔を草叢に開きました。六月に石澤正男館長のあとをうけて、新任してから早くも三ケ月になりました。美術館事業については不慣れな私も、すでに長い年月もここにて初代館長矢代幸雄先生以来、石澤前館長とともに館の仕事に携って来た堪能な館員諸兄諸姉のお蔭で、これまで過去二十年の豊かな充実した歳月を経過してきた軌道に従って無事に歩み出しました。

四年ほど前、石澤前館長から昭和55年の秋、大和文華館が創立二十周年を迎えるので、その行事を祝って引退したい旨を申されて、代って後を引受けないかとのお言葉に、西洋中世美術の勉強で余生を送ろうと思って居りましたところで、少々とまどいましたが、奈良の古代美術は、シルクロードをなかにして、フランスの中世初期美術と東西の両端で相互に、古代の古典美術の伝統を中核として育ってきたものなので、従来から絶えず、西洋美術研究にたずさわりながら、日本、中国、中央アジア、オリエントの連関を忘れられなかった私は、御厚意に感謝し、それまでに、ロマネスク壁画の調査報告も仕上げて、新しいオリエントとフランス中世美術の関係、さらに40年前に書いたバーミャーン美術の研究も見直したい。また、こうなれば敦煌も見たいなどと年齢も顧みず、いろいろと夢の計画をたてて、御厚情に感じ是非御引受したいと御願い申しました。私が戦前留学時代にサン・サヴァンの壁画の調査研究を決心したのも、東京帝大の学生時代に先輩につれられて法隆寺の壁画を見学して、壁画というものの研究法を少々教えられ、壁画を前に印象など語り合った経験、また敦煌画の厖大な写真資料を整理される松本栄一博士の研究方法の一端を傍で拝聴したことなどが、フランスで教会堂壁画を前に、調査に適した場所を選び、研究の見通しに自信をもたせたからでした。私にとって、奈良の古代美術は日本美術の源であるとともに、西洋の中世初期の美術と姉妹関係にある美術であり、古典古代の様式を継承する点で、数多くの当時の諸美術とともに、古代の国際的な文化交流の結実の一つと思われるのです。日出ずる国、日沈む国との言葉は、オリエント、オクシデントという語の全くの翻訳であって、あの古い時代の日本の指導者たちが遙か彼方の地中海世界をなかにインド、中国から大西洋沿岸に至る東西交流の事情を感知していた様子が窺えるようです。古代より中世に渡る文化交流への展望をもって、奈良の国立博物館が佛教美術の諸展観に精力的に取組んで居られるのも、奈良の地理的、歴史的地位の特権でありましょう。奈良はまた、岡倉天心が明治の日本美術の創造を目ざし、天平の復興を心がけ、ここに拠点を置くことを考えたと言うことです。この遺志が故上野直昭東京芸大学長によって東京芸術大学の奈良研究所の設立に承け継がれました。

さて、大和文華館は、ご承知の通り、初代館長の矢代幸雄先生が戦時中に当時の関西急行（現在の近鉄）社長の故種田虎雄氏の奈良・三重の両県にまたがって運営されるこの鉄道の精神的使命を荷う文化的事業のセンターとして将来奈良の地に美術館を設立したいという抱負と計画を実現するために協力されることとなって、まず大阪府下の道明寺に居をかまえられ、まず優秀な美術品の蒐集に着手されることとなったのが糸口で、大和文華館の設立は昭和35年に現在の佐伯会長が社長時代に近畿日本鉄道設立50周年の記念事業の一つとして実現されたのです。横浜出身の矢代先生は、この事業を引受けられるにあたって、いつも念頭にあったのは岡倉天心と異色の蒐集家原富太郎翁とであったようです。天心の生家は、矢代先生の生れ育った横浜の境町の家から出て、すぐ向いの大通の一角にありました。公けには話されなかった様子ですが、内輪で語られる時には、美校教授時代から、時折天心を継いで天心を越えるともらされてました。日本美術をいつも世界の美術のなかに置いて見ると言って居られたし、美術を通じて世界の人々が心を開き親しく結ばれる、これが美術の人類的使命だと言われてました。大和文華館が開かれると、絶えず内外の名士を迎え、古美術の名品を前に美を語り、日本や東洋の心を親しく知らせることに務められましたのもこの抱負の一端でありましょう。

横浜の実業家原富太郎翁は古美術蒐集家であると同時に新日本画の創造のために助力を惜しまなかった方でした。院展派の画家たちのパトロンとして、広い邸内の池に面し、山を背にした名建築、臨春閣に古美術品を陳べ、若い頃の大家たちが名品を前に画を学び、美術を語らった会合を随時開いて、新しい日本美術の創造を希ったのでした。矢代先生はこの原家の「美術サロン」に学生時代から親しく出入された模様ですが、ここでは美術家の外に、和辻哲郎、上野直昭、児島喜久雄と言った当時まだ若かった美学者たちもこの名品観賞会に招かれて、泊りがけで画を見て、庭を眺め、夜を徹して論じたと言うことをこれらの先生がたから聞きました。名品を見て、美を味い、人格を育てるという贅沢な美の道場のようなものだったでしょう。青春時代のこのような経験は確かに矢代先生が、大和文華館を運営していく場合に思い出されていたのではないでしょうか。

美校の教職を退いた先生は種田社長の申出に大変感動されたことでしょう。若い時からの夢が実現される機会がきたと思われたでしょう。いつか、その頃、お目にかかった時、いままで皆のために色々と骨を折ってきた、これからは僕の思うことをやらしてもらう、と言って大変な努力を傾けて、名品の蒐集のために東奔西走されていた様子で、この時期、原家がその後の経営不振から次第に貴重なコレクションを一部づつ手放されると言うので、原三溪翁の秘蔵の名品いくつかが、この新しい近鉄の蒐集に移っていったのでした。横浜に育った私も、やはりここに原さんの名品がいくつも在ると言うことは、横浜港の盛時を偲ぶ懐しい心持です。

さて、三代目の館長となりまして、運営の方針はときかれますと、やはり初代以来の伝統を守ります。美術館は美を忘れて、学者の資料本位の興味や考証事で引廻わされぬようにとよく言われた初代館長の意志を継ぎ、美を楽しみ、味わい、人生のためになる施設として運営してゆきたいと思います。

季刊 美のたより No.56
昭和56年 8月 27日
発行　大和文華館

Copyright ©2007 The Museum Yamatobunkakan. All Rights Reserved.